

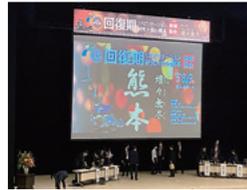
## 回復期リハビリテーション病棟協会第43回研究大会 in 熊本

順天堂大学大学院医学研究科リハビリテーション医学 補永 薫

2024年3月8日～9日の2日間、熊本城ホールにて、回復期リハビリテーション病棟協会第43回研究大会 in 熊本（大会長は社会医療法人寿量会熊本機能病院 渡邊進先生）が開催されました。本大会のテーマは「燈々無尽」であり、「先人から受け継いだものを、その質をより高めて次へ渡していく」というメッセージが込められているそうです。

本研究大会は多職種協働の考えのもと、さまざまな職種から忌憚らない意見が飛び交うのが特徴です。特別企画「匠の伝承：嚙下障害はどのように管理するか？」では、重度の嚙下障害例に対する治療のプロセスを多職種からのコメントを交えて解説していました。シンポジウム「地域へつなげる！就労支援～退院支援から地域支援体制の実際～」では回復期リハビリテーション病棟における地域での就労支援の重要性とその可能性について、地域の立場、病院の立場からのメッセージを伝えていました。

各会場は満員の大盛況でした



シンポジウム終了後も関連な議論が絶えませんでした

現在回復期リハビリテーション病院数は1,500施設、病床数は90,000床を超えており、本大会の担う役割は、今後ますます大きくなっていくと考えられます。第45回の研究大会は2025年2月21～22日に「Be ambitious！学んで前へ～'24同時改定を力に変えるために～」をテーマに札幌で開催予定となっております。奮ってのご参加をお願いします。

## 第68回日本リウマチ学会総会・学術集会

大阪医科薬科大学リハビリテーション医学教室 佐浦隆一

第68回日本リウマチ学会総会・学術集会（山形大学、高木理彰会長）は現地（4月18日～20日）と5月1日からのオンデマンド配信により開催された。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックから4年を経て、この開催形式が定着した感があるが、現地で聴講し、さらに閉会後も聴講できなかった講演を視聴できるメリットは大きい。

さて、老練なフライフィッシャーが好んで使う言葉に由来するテーマ“流心をとる”に込めた会長の想いは「川の流れの中心で最も勢いよく流れる“流心”を捉えるが如く、溢れる情報に容易にアクセスでき、AIが囁く今だからこそ、その真質や価値を見極め、物事の本質（流心）を的確に捉える（Catch the Essence）ためには弛まぬ努力を要し、創意工夫が欠かせない。」という挨拶に凝縮されている。

リウマチ性疾患は免疫異常という病態や病期の進行に伴う身体機能障害の重度化など、薬物治療が進歩しても決して一筋縄ではいかず、生涯にわたり患児・患者の人生（ライフステージ）や生活（ペイサントジャーニー）に寄り添い、内科、整形外科、小児科、リハビリテーション科など多くの診療科と専門職が集学的かつ

第68回日本リウマチ学会総会・学術集会・会長挨拶



Reuma と日本のリウマチ施設のあゆみ—流心をさがして—の展示から（高木理彰会長の今昔）

包括的に取り組むべきもの、まさに本質（流心）を捉えた治療やケアが必須である。学術集会は会長のフィンランド留学中の展示など盛りだくさんで、そんな高木理彰会長の想いが溢れんばかりのプログラムであった。

第69回総会・学術集会（長崎大学、川上純会長）は2025年4月に「リウマチ学の未来予想図」をテーマに福岡市で開催される。

リウマチ学の明日はどっちだろう？ 答えを期待して参加したいと思う。